

日残りて昏るるに未だ遠し

中央区・清滝支部 小田原良治
(小田原病院)

「日残りて、昏るるに、未だ遠し」。藤沢周平の三屋清左衛門残日録のタイトルである。三屋清左衛門残日録は、筆者が若い頃読んで、好きになった本である。この本をきっかけに、藤沢周平の小説は、ほゞ、すべて読んだであろう。三屋清左衛門残日録は、ほゞ、10年毎に何回も読みなおしている。もっとも、読みなおすといっても、本がどこにいつてしまったか見当もつかず、その度に文庫本を購入しているわけである。藩の要職を辞し、三屋家の家督を息子に譲り、隠居した清左衛門が日記に「残日録」と名前をつける。息子の嫁の里江が、残り日を数える生活は不都合だと意見を言う。清左衛門は、それを否定し、「まだ、日は残っている。昏れるには、まだ刻がある」という意味だと話す。隠居し、時間を持て余す清左衛門は、若き日をたずね、釣りをし、無外流の剣術の道場に通う。昔の友を訪ね、小料理屋「涌井」で適度の酒を飲む。

清左衛門の若き日の仲間は、未だ現役で頑張る、町奉行の佐伯熊太もあり、隠居し趣味を楽しむもの、失意にあるもの、逆恨みするものいろいろである。それぞれの人生模様に関わりながら、清左衛門は、距離をおいたはずの藩の派閥抗争に巻き込まれていく。かつての切れ者用人、清左衛門を周りは放っておかない。小説とともにドラマ化され、仲代達也が演じた清左衛門は味があった。清左衛門は残日を悔い、悩み、悲しみながら充実して生きる。何回読んでも、新たな感動が見つかる。

国は、さらなる雇用延長を打ち出している。「残り日を数えるのではない、日はまだ残っている。昏れるにはまだ時間がある。まだま

だ働いて社会貢献してくれ」と言っている。昔の頑固親爺たちも言っていた。「まだまだ、若い者には負けん」と。体力は落ちる、頭の回転も鈍くなる、しかし、蓄積した知恵は残る。人手不足の解消に、外国人労働者、女性活用などいろいろ言われているが、一番の解決策は高齢者が働くことであろう。しかし、働くことの生き甲斐がなければならぬ。稼いだら年金を減らすなどもってのほかであろう。働いて、社会に貢献し、稼いで、酒を飲み、旅をし、孫にいい恰好して、そしてちょい悪オヤジで、通夜の席が宴会になる、それもいい人生かもしれない。

因みに、この時の三屋清左衛門の年令は52歳である。いやはや、いまどき、52歳で隠居などできない。

清左衛門の物語に魅力を感じ、清左衛門の人生に想いを馳せながら飲む酒は旨い。旨い酒、「涌井」の女将、みささんが清々しく艶っぽい。